

八王子城（国の史跡, 百名城）（八王子市元八王子町）

八王子城（はちおうじじょう）は、日本の16世紀に、当時の武蔵国（東京都八王子市元八王子町）に存在していた日本の城である。

概要

北条氏の本城である小田原城の支城であり、関東の西に位置する軍事上の拠点であった。延喜13年（913年）に華嚴菩薩妙行が山頂で修行中に牛頭天王と8人の王子が現れた因縁で延喜16年（916年）、この城の山頂に八王子権現を祀ったことから、八王子城と名付けられた。

八王子城は標高445m（比高約240m）の深沢山（現在の城山）に築城されており、典型的な中世山城である。縄張りは、北浅川・南浅川に囲まれた東西約3km・南北約2〜3kmの広大な範囲に及び、山の尾根や谷など複雑な地形を利用し、いくつかの地区に分けられていた。地区は、山頂に置かれた本丸、松木・小宮曲輪など何段もの曲輪を配置した要害地区、城山川沿いの山腹に御主殿と呼ぶ館を構えてその東側にアシダ曲輪で防衛している居館地区、城山川に沿った麓に城下町を形成した根小屋地区、などで構成されていた。周辺にはいくつもの砦を配し、それらを結ぶ連絡道の要所には、深い堀切や堅堀、兵舎を建てるための曲輪などが造成されていた。特に、居館地区の南側尾根にある太鼓曲輪は、5つの深い堀切で区切られ、南側を石垣で固めるなど、容易に尾根を越えられない構造となっていた。城全体が余りに広大であったため、落城時には未完成であったと言う説もある。

城下町には、武家屋敷のある中宿、刀剣鍛冶職人の居住区である鍛冶屋村に加え、滝山城下から移転した商業地区の八日市・横山・八幡三宿があった。また出城には、搦手の防衛線を形成する浄福寺城（案下城）、小田野城の他、初沢城などがあった。

なお、八王子市文化財課が管理する現在の「八王子城跡」としての範囲には、太鼓曲輪尾根の南斜面を含む南部のエリアなどが含まれておらず、各所に霊園や私有地も入り組んでいるため、史跡としては実際よりかなり狭い範囲に限定されている。このため、住宅地の側にも多くの遺構を確認することができる。

歴史・沿革

北条氏康の三男・氏照が1571年（元亀2年）頃より築城し、1587年（天正15年）頃に本拠とした。氏照は当初、大石氏の滝山城に拠っていたが、小田原攻撃に向かう甲斐国（現在の山梨県）・武田信玄軍に攻められ、その際に滝山城の防衛の限界を感じ、織田信長の築城した安土城を参考に石垣で固めた山城構築を行い、本拠を滝山城から移した。滝山城は広大かつ多くの角馬出や内柵形を備えた近世的な平山城であったが、山城である八王子城に移ったことで氏照は時代に逆行したとも言われている。しかし、八王子城は一般的な山城のような尾根と堀切を利用した縦深防御に加えて、侵入してくる敵に対しての所から側射をかける仕組みになっている。織豊系城郭と比較するとかなり独特ではあるが、より近世的な戦術を志向している。

八王子城合戦

小田原征伐の一環として1590年（天正18年）7月24日（旧暦6月23日）、八王子城は天下統一を進める豊臣秀吉の軍勢に加わった上杉景勝・前田利家・真田昌幸らの部隊1万5千人に攻められた。当時、城主の氏照以下家臣は小田原本城に駆けつけており、八王子城内には、城代の横地監物吉信、家臣の狩野主善一庵、中山勘解由家範、近藤出羽守綱秀らわずかの将兵の他、領内から動員した農民・婦女子を主とする領民を加えた約3000人が立て籠ったに過ぎなかった。

豊臣側は前夜のうち霧をぬって主力が東正面の大手口（元八王子町）・北側の絡め手（下恩方町）の2方向より侵攻し、力攻めにより早朝には要害地区まで守備隊を追いやった。その後は激戦となり1000人以上の死傷者を出し、一時攻撃の足が止まった。その後、絡め手側別働隊の奇襲が成功し、その日のうちに城を落とした。氏照正室・比佐を初めとする城内の婦女子は自刃、あるいは御主殿の滝に身を投げ、滝は三

日三晩、血に染まったと言われている。城代の横地監物は落城前に檜原村に脱出したが、小河内村付近にて切腹している。

八王子城攻防戦を含む、この小田原征伐において北条氏は敗北し、城主の北条氏照は当主・北条氏政とともに切腹した。その後新領主となった徳川家康によって八王子城は廃城となった。

現代

1945 年（昭和 20 年）当時は、山頂付近を除く城山一帯が戦時中の木材伐採のため禿山となっていたのが、戦後米軍機の撮影した航空写真（国土交通相保管）に残されている。戦後、ヒノキなどが植林され、現在の状況となった。

1951 年（昭和 26 年）6 月 9 日、国の史跡に指定され、発掘調査や整備も進み、御主殿跡付近の石垣、虎口、曳橋などが復元されている。しかし曳橋は、橋脚の部分しか資料が発見されていないために、橋脚以外の部分は復元工事の担当者の推定で建てたものである。

居館地区など、重機が入り易いエリアの発掘調査や復元作業は進んでいるが、城山要害部については樹木の伐採も一部を除いてはほとんど行われていない。各所に僅かに残された石垣も、土砂崩れや樹木の根こそぎ倒壊によって失われつつあり、崩落により既に通行不能となった水平道もある。自然や人の往来による遺構の破壊の他、林道の整備や、登城道（新道）の整備によって、部分的に失われた遺構も多い。

2006 年（平成 18 年）4 月 6 日、日本 100 名城（22 番）に選定された。

城山要害部の西端直下に首都圏中央連絡自動車道の八王子城跡トンネルが通っている。

史跡

城山の麓

- 御主殿跡

落城後は徳川氏の直轄領、明治以降は国有林であったため、落城当時のままの状態と保存されている。発掘調査の結果、礎石を沢山つかった建物の跡や水路の跡、多数の遺物が出土した。なお礎石は土砂で被われ表面は芝生となっているが、今でも当時のまま残っている。2012 年から地中の遺物のダミーを地上に設置する整備が行われ、2013 年に完成した。庭園部にある石の 1 つのみは戦国時代当時のものである。

- 虎口

石垣や石畳は当時のものをそのまま利用し、できるだけ忠実に復元されている。御主殿入口の冠木門（かぶきもん）は、当時の門をイメージし復元。写真にある冠木門は、老朽化のため 2010 年に新築されている。

- 古道と大手の門跡

当時御主殿へ入る道として使われていた。門の礎石や敷石が 1988 年の確認調査で発掘されたが保存のために埋め戻されている。

- 曳橋（ひきはし）

古道から御主殿へわたるために城山川に架けられた橋。ただ現在の橋は、当時の道筋を再現するために現在の建築技術で当時の雰囲気を考えて架けられたもの。実際の構造は、敵の侵入時に板を外したり、橋桁ごとスライドする大がかりなもの（八王子城管理事務所内所蔵）まで、諸説がある。御主殿側の橋台の位置は、実際より 5m ほど東側にずれており、そのため御主殿側に不要な石段の段差が出来ている。橋台の西側の石垣は、林道整備のため削られ移築されている。

- 御主殿の滝

落城時に御主殿にいた北条方の婦女子や武将らが滝の上流で自刃し、次々と身を投じたと言われている。また戦によって城山川の水が三日三晩血に染まり、麓の村では、この城山川の水で米を炊けば赤く米が染まるほどであったと伝えられる。これが起因して先祖供養にあずきの汁で米を炊いた

「あかまんま」（即ち赤飯）を炊いて供養をする風習が現在でも続いている^[1]。尚、赤飯供養はそれほど珍しいものではなく、北条氏の拠点である神奈川県の上野神社例祭では供物に赤飯を用いたり、他にも静岡県蓮華寺など赤飯供養の風習は日本各地で続いている。

御主殿の滝の林道側には、高さ 3m、幅 10m 程の小山が残っているが、元々は御主殿方向に繋がった土塁であった。現在は林道整備により半分以上が削られている。この土塁をダムにして、上流に御主殿の先まで続く大きな溜め池があったとする説が有力である（参考文献 2 参照）。

城山の麓から中腹

- 福善寺
千葉県に福善寺と呼ばれる寺があり、円通寺住職の余生を送るためや若い僧の修行に使い隠居寺であった。福善寺が江戸時代に荒廃し、円通寺は明治の始に渋谷の吸江寺と合併した為、拙堂和尚が城跡に福善寺を復興した。
- 路傍の石仏（観音像）
108 体といわれる観音。実際には 16 体しか見られない。御主殿跡へのルートとして、古道を通るルート以外、石仏を巡りながらのルートもある。
- 金子丸跡
金子三郎左衛門家重が守備をしていたといわれている。尾根をひな壇状にし、敵の侵入を防ぐ工夫がされている。現在は天守へ向かう最初の休憩所としてベンチが設置されている。（次の休憩所は 8 合目までない）

城山の山頂付近

- 本丸跡（城山山頂）
城の中心で最も重要な曲輪。横地監物吉信が守備していた。頂上の平地部は 10 メートル四方程度の広さが残っている。
- 松木曲輪跡（展望スペース）
八王子神社の奥に位置し、中の丸とも二の丸とも呼ばれていた。中山勘解由家範が守備していた。前田利家軍を相手に奮闘したが、多勢に無勢で防ぎ切れなかった。
- 小宮曲輪跡
三の丸とも一庵曲輪とも呼ばれていた。狩野一庵が守備していた。搦手の隠し通路である棚沢道を突き止めた上杉軍に背後から奇襲され、落とされた。
- 八王子神社

詳細は「八王子神社」を参照

大手側からも搦手側からも最終的にはここに誘導されるようになっているが、三方を本丸、松木曲輪、小宮曲輪に囲まれた窪地であり、十字砲火に晒されるキルゾーンとなっていた。

- 井戸
山頂付近にはいくつか井戸が確認されている。南側斜面にある坎井（かんせい）という井戸は、水質検査にも合格するレベルであるが、飲用としての厳密な管理はされていない。
- 伝大天守跡
本丸が陥落した際に最後の拠点にするべく構築された詰城。部分的に石垣が残っている。天守閣跡と伝わっているが、それらしき建物が建っていた痕跡は無い。背後（西側）には深さ 10m 以上の大堀切があり、背後からの敵の侵入を阻止している。さらに北側と東側の尾根筋には両翼 600m に渡って石塁が築かれていた。殆ど崩れてしまっているものの、石自体は残っている。



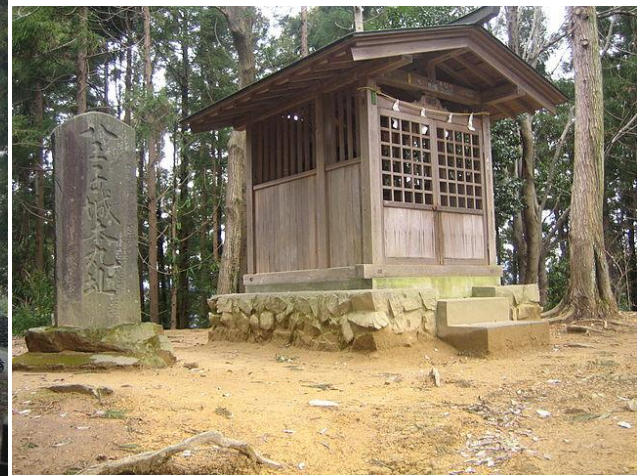
御主殿跡へ通じる虎口と冠木門



御主殿の滝



曳橋（推定復元）と御主殿石垣（一部復元）



本丸跡

